

日本郭沫若研究会事務局

二〇一二年一月一日発行

郭沫若研究會報

第十三号 (總 No. 14)

目次

郭沫若の旧詩体における自然との交流……………横打 里奈

第六高等学校創立百十周年記念論文集 郭沫若研究

大高順雄 于亚 共編

郭沫若の詩聯と河南省固始県にある

鄭成功墓とのかかわりについて……………齊藤 孝治

郭沫若『女神』「序詩」、「夜」に見る

マルクス主義的共産主義的世界観

国士館大学文学部文学科日本文学・文化専攻 中山 新也

「資料紹介」《五十年の死角》……………川崎 馨子

第三回國際郭沫若学会國際会議

— 郭沫若誕生百二十周年記念学会 — 報告

藤田 梨那

「研究動向」

郭沫若生誕百二十周年記念行事、次々に挙行

『女神』刊行九十周年記念國際學術検討会参加記

岩佐 昌暲

日本郭沫若研究会事務局

二〇一二年一月一日発行

〒八六二一八六八〇

熊本市大江二一五一

熊本学園大学外国語学部岩佐研究室気付

TEL 〇九六一三六四一七〇九八（直通）

〇九六一三七二一〇七〇二

郭沫若の旧体詩における自然との交感

横打 理奈

はじめに

郭沫若の『女神』の重要な思想の一つとして汎神論が挙げられる。郭沫若にとつての汎神論とは、莊子に由来する「宇宙万物を一つの實在する本体のあらわれ」(『創造十年』)において自然と人間を一体のものとみなす考え方であった。事実、『女神』の中には詩人と自然との交感を主題にした作品が少なからずある。

そこで本論では、郭沫若の中で自然との交感というモチーフがどのように醸成されてきたのか、それを郭沫若の旧体詩から探っていききたい。ここでは、『女神』制作時期までの旧体詩に限定して見てみたい。

一、留日初期の叙景詩

郭沫若の留日初期に書かれた旧体詩には、自然の情景を詠む所謂、叙景詩に分類される作品が幾つかある。

房州北条一

鏡浦真如鏡、
波舟蕩月明。

鏡浦は真に鏡の如く、
波舟は月明かりに蕩ふ。

遙将一樽酒、
載向島前傾。

遙かに将(と)る一樽酒、
載せて向かひ島前に傾けん。

【訳】

鏡ヶ浦は本当に鏡のよう、波間の舟はまるで月明かりに浮いている。
はるか遠くに酒杯をかかげ、島と差し向かいに飲みたいも

のだ。

【語釈】

鏡浦：鏡ヶ浦は千葉県にある湾で、館山湾の別称で、那古浦とも呼ばれる。富士山を鏡のように写す静かな湾ということが語源。またこの地は、明治十一年に東京・房州間に汽船が就航したことにより、それまで水産業が中心であった地が遊樂地へと変化することとなった。また明治三十一年に第一高等学校の水泳部が神奈川県の三浦から水練場を移動したことなどにより、明治三十四年頃からは海水浴場としても有名になり人が多く集まるようになった。

一樽酒：「我攜一樽酒、獨上江祖石。」(李白「獨酌清溪江石上寄權昭夷」、『全唐詩』卷一七二)

房州北条三

白日照天地、

秋聲入早潮。

披襟臨海立、

相對扇峰高。

白日天地を照らし、

秋聲早潮に入る。

披襟海に臨み立てば、

相対して扇峰高し。

【訳】

太陽は天地を照らし、秋風は朝の波を動かす。

胸を開いて海に立てば、向こうには富士山がそびえている。

【語釈】

秋聲：「城邊有古樹、日夕連秋聲。」(李白「沙丘城下寄杜甫」、『全唐詩』卷一七二)

披襟：「披襟眺滄海、憑軾玩春芳。」(太宗皇帝「春日望海」、『全唐詩』卷一)

扇峰：富士山を指す。ここでは、鏡ヶ浦から遙か沿岸の富士山を指すが、実際問題として明治二十二年の「房州鏡浦略図」

や大正四年に描かれた「鏡ヶ浦図絵馬」などを見ると、正面

に富士山を配置して伊豆と相模を対岸に重ねる鏡ヶ浦を描く構図がある。ここには誇張ではあるにしても描かれていること、また富士山を写すということが語源という地名を考えると、恐らく遠くに見えたのであろう。

晩眺

暮鼓東臯寺、
鳴箏何処家。
天涯看落日、
郷思寄横霞。

暮に鼓す東臯の寺、
箏を鳴らすは何処の家か。
天涯に落日を看、
郷思横霞に寄す。

【訳】

夕暮れに鐘打つ東の丘の寺、箏を奏でるのはどこの家だろう。

天の果てにて沈む太陽を見ながら、望郷の念をたなびく霞に託した。

【語釈】

暮鼓…「曉鼓人已行、暮鼓人未息。」(王貞白「長安道」、
『全唐詩』卷七〇一)
東臯…「登東臯以舒嘯、臨清流而賦詩。」(陶淵明「歸去來辭」、
『文選』卷四五)、
「東臯薄暮望、徙倚欲何依。」(王績「野望」、
『全唐詩』卷三七)
鳴箏…「樓頭小婦鳴箏坐、遙見飛塵入建章。」(王昌齡「青樓曲二首」、
『全唐詩』卷一四三)
天涯…「天涯非日觀、地配望星樓。」(駱賓王「久客臨海有懷」、
『全唐詩』卷七八)
落日…「出山看落日、驅馬向秋天。」(高適「河西送李十七」、
『全唐詩』卷二一四)

自然との交感という視点から見ると、「房総北条一」は

美しい景色を目の前にして酒を飲みたいと心情を表現しているだけである。ここには自然と自分との間に相互のコミュニケーションは見られない。「房総北条三」は自分と富士山と対峙しているが、その両者の間に如何なる関係が成立したのかは描かれていない「晩眺」では、自然の情景に、望郷という自分の感情を一方的に投影している。

このように、留日初期の頃には、自然との交感という視点はなく、感情を投影することはあっても、情景を淡々と描くという、唐詩によく見られるような、いわゆる叙景詩の域を出ていない作品を創作していることがわかる。

二、自然との交感の始まり

しかし、次に挙げる二つの作品には、自然から詩人に対する働きかけと詩人から自然に対する働きかけ、この両者が一つの作品の中に描かれている。

與成仿吾同游栗林園

清晨入栗林、	清晨栗林に入り、
紫雲挿晴昊。	紫雲晴昊に挿す。
攀援及其腰、	攀援して其の腰に及べば、
松風清我腦。	松風我が脳を清くす。
放觀天地間、	天地の間を放觀すれば、
旭日方杲杲。	旭日方に杲杲たり。
海光蕩東南、	海光は東南に蕩き、
遍野生青草。	遍野青草を生ず。
不登泰山高、	泰山の高きに登らざれば、
不知天下小。	天下の小さを知らず。
稊米太倉中、	稊米は太倉の中、
互虫争米了。	互虫争米了らう。

長嘯一聲遙、
狂歌入雲抄。

長嘯一聲遙かにして、
狂歌雲抄に入る。

【訳】
明け方に栗林園へ行くと、紫雲山が青空にそびえていた。中腹まで登ると、松風が私の脳を洗い流した。天地の間を見渡せば、朝日はきらきらと輝いている。海上の光が東南の方向にゆらめき、野原には草が青々としている。

泰山の高さまで登らなければ、天下の小ささはわからない。
ひえ粒は大きな倉の中、カタツムリの角上の戦いはまだ終わらない。
長々と一声上げれば遙か遠く、心のままに叫んだ歌は雲の向こうに消えた。

【語釈】

栗林園：栗林公園。香川県高松市にある日本庭園。讃岐領主生駒高俊に蔵営されて以後、一六四二年に入封した松平氏によって約百年かけて造営された。一八七五年に県立公園として公開されるようになった。現在は特別名勝に指定。

清晨：「清晨發皇邑、日夕過首陽。」（曹植「贈白馬王彪」、
『文選』卷二四）「清晨入古寺、初日照高林。」（常建「題破山寺後禪院 常建」、
『全唐詩』卷一四四）

紫雲：紫雲山。香川県高松市にある岩清尾山塊のうちの一つで、標高一七〇メートル。麓に栗林公園がある。

晴昊：「安得健步移遠梅、亂插繁花向晴昊。」（杜甫「蘇端薛復筵簡薛華醉歌」、
『全唐詩』卷二一七）

攀援：「是故禽獸可係羈而遊、鳥鵲之巢可攀援而闚」（『莊子』外篇馬蹄第九）

旭日：「清露澄境遠、旭日照林初。」（韋應物「秋郊作」、
『全唐詩』卷一九二）

杲杲：「其雨、其雨、杲杲出日」（『詩經』衛風、伯兮）
稊米太倉中：「計中國之在海內、不似稊米之在大倉乎。」
（『莊子』外篇秋水第十七）

蠻觸爭未了：「有國於蝸之左角者曰觸氏、有國於蝸之右角者曰蠻氏、時相與爭地而戰、伏尸數萬、逐北旬有五日而後反。」（『莊子』雜篇則陽第二十五）、
「螻螟殺敵蚊巢上、蠻觸交爭蝸角中」（白居易「禽蟲十二章」、
『全唐詩』四六〇）

狂歌：「痛飲狂歌空度日、飛揚跋扈為誰雄。」（杜甫「贈李白」、
『全唐詩』卷二二四）

雲抄：「百頃青雲抄、層波白石中。」（杜甫「天池」、
『全唐詩』卷二二九）

游操山

怪石疑群虎、

怪石疑うらくは群虎かと、

深松競奇古、

深松奇古を競ふ。

我來立其間、

我來りて其の間に立ち、

日落山含斧、

落ちて山斧を含む。

血霞泛太空、

血霞太空に泛び、

浩氣蕩肺腑、

浩氣肺腑に蕩う。

放聲歌我歌、

聲を放ちて我が歌を歌ひ、

振衣而亂舞、

衣を振りて乱舞す。

舞罷道下山、

舞ひ罷めて道山を下れば、

新月雲中吐、

新月雲中に吐く。

【訳】

怪石は虎の群れのように転がり、青松はどれも奇妙に曲がっている。

その中に立っていると、日が落ちて山に斧が振るわれた。真つ赤な霞が空にたなびいて、浩然の気は肺腑にたゆたう。

声に出して我が歌を歌い、衣を翻して踊る。

踊り終えて道すがら下山していると、新月が雲の中に吐き出された。

【語釈】

游操山：岡山市街地、約三キロほどに位置する里山。標高は約一七〇メートル。護国神社や古墳群があり、また曹源寺の参道には松林がある。

怪石疑群虎：「雷劈老松疑虎怒、雨衝陰洞覺龍腥。」（殷

文圭「九華賀雨吟」、『全唐詩』卷七〇七）

山含斧：「芳菲含斧藻、光景暢形神。」（韓愈「和席八（夔

十二韻（元和十一年、夔與愈同掌制誥）」、『全唐詩』卷三四四）

肺腑：「春興酒香薰肺腑、夜緊雲氣溼髭鬚。」（齊己「寄

萍鄉唐稟正字」、『全唐詩』八四五）

放聲：「登封徒放聲、天地竟難尋。」（孟郊「弔盧殷」、『全唐詩』卷三八一）

「與成仿吾同游栗林園」では、松風が「脳」に入り、洗い流すことがきつかけとなり、詩人の詩を天地に向かって叫んでいる様が描かれている。「游操山」では、「肺腑」に浩然の気が入ったことで、やはり詩人は歌い踊った。ここには詩全体を貫く主題ではないが、自然との交感が重要なモチーフとして具体的に描写されるようになっていく。

当時、郭沫若は岡山第六高等学校に在籍しており、すでに医学部への進学の準備を始めている。「脳」や「肺腑」という表現は具体的な身体感覚の反映かもしれない。しか

し、それ以上にこのような自然との交感を描く契機として考えられることが、一九一五年の静坐による、ある種の神秘体験である。当時神経衰弱に陥った郭沫若は、岡田式静坐法を参考に毎日瞑想を行うことで、世界が輝いて見え、莊子やスピノザの本当の意味を身体的に理解する、という非常に大きな体験をしている。両親に書いた手紙から彼はその後静坐を続けていたことがわかっている。つまり、自然との交感の実体験に基づくもので、単なる文学的修辭として採用されたものではない。

ただし、この二つの作品では自然との交感という主題が前面には出てきていないし、同じ時期にまだ旧来の一般的な叙景詩も創作している。

詠博多湾

博多湾水碧留黎、 博多湾水 碧に黎を留む、

白帆片片随風飛。 白帆片片 風に随ひて飛ぶ。

願作舟中人、 願はくは舟中の人と作りて、

載酒醉明輝。 酒を載せて明輝に酔はん。

【訳】

博多湾の水は緑だが、黒みを残しており、白い帆がつると風に乗って飛んでいく。

願わくは船の人となって、酒を携えて月の下で酔いたいものだ。

【語釈】

博多湾：福岡県北西部にある玄界灘に面している。郭沫若の詩においては「巨砲之教訓」などに数多く使用されている。

随風飛：「舞罷飛燕死、片片随風去。」（雜曲歌辭 大垂手）、『全唐詩』卷二六）

この作品の創作時期は一九一八年、すでに九州帝国大学医学部に進学した時期に作られている。しかし詩の構造としては先に挙げた「房総北条 三首」第一首と全く同じ構造になっている。

このように定型に従った叙景詩を作りつつも、郭沫若は創作としては一段階進んだ作品に挑戦するようになっていた。但しこの段階ではまだ自然との交感明確には示されていないのである。

三、自然との交感

さて、一九一八年に書かれた「十里松原 四首」の第一首を見ると、そこには自然との交感が端的に描かれている。

十里松原 四首

十里松原負稚行 十里松原稚を負ひて行き、
耳畔松聲并海声。耳畔の松聲は海声に并ぶ。
昂頭我向天空笑、頭を昂げ我れ天空に向かひて笑へば、
天星笑我步難行。天星我が歩行き難しを笑ふ。

【訳】

十里松原に幼子を背負って行けば、松風と海の波の音が聞こえてくる。
顔を上げて天に向かって笑えば、星は私の歩みがおぼつかないのを笑った。

【語釈】

十里松原 四首…この四首は一九一八年の大晦日に福岡で詠んだ詩である。当時郭沫若は箱崎神宮のそばに住ま

いを構えていた。この一帯にあったのが千代の松原である。

詩人が天に笑いかけると、天が詩人に笑い返すというように、詩人と自然の間のコミュニケーションが完全に成立している。

新月與晴海

児見新月、

遙指夜空。

知我兒魂已飛去、

游戲廣寒宮。

児見晴海、

児學海號。

知我兒心正飄蕩、

追隨海浪潮。

児は新月を見て、

遙かに夜空を指す。

我が児の魂已に飛び去り、

廣寒宮に游戲するを知る。

児は晴海を見たり、

児は海の號ぶを學ぶ。

我が児の心正に飄蕩として、

海の浪潮に追隨するを知る。

【訳】

この子は新月を見て、
遙か彼方の夜空を指さす。
そうだ我が子の魂は既に飛び去って、

廣寒宮に遊んでいるのだろう。
この子は青い海を見て、

海が叫ぶことを知った。
そうだ我が子の心はあちこち漂い、

海流について行っているのだろう。

【語釈】

廣寒宮…「開元六年。上皇與申天師道士鴻都客。八月望日夜。因天師作術。三人同在雲上遊月中…頃見一大宮府。榜曰。廣寒清虛之府。」（柳宗元「明皇夢遊廣寒宮」、『龍

城録』巻上)。詩集『星空』に「廣寒宮」と題した戯曲を収める。

この詩では、自然との交感の行き着く先として、詩人の魂は身体から抜け出し、自然の中に入っていくという、いわば魂の飛翔が描かれている。作品中では子供に仮託しているが、これはもちろん詩人自身の体験と見てよい。この魂の飛翔というモチーフは、その後、たとえば『女神』に収録された「晨安」などで大きく展開されている。

この時期に書かれた郭沫若の旧体詩の中で、自然との交感が全面的に描かれているものとして「春愁」という作品が挙げられる。

春愁

是我意凄迷、	是れ我が意の凄迷なるか、
是天蕭條耶。	是れ天の蕭條たるか。
如何春日光、	如何んぞ春日の光、
惨淡無明輝。	惨淡として明輝無し。
如何彼岸山、	如何んぞ彼岸の山、
低頭不展眉。	頭を低れて眉を展かず。
周遭打岸聲、	周遭の岸を打つ聲、
海兮汝語誰。	海よ汝誰と語るや。
海語終難解、	海の語終に解し難く、
空見白雲飛。	空しく見る白雲の飛ぶを。

【訳】
私の気持ちが落ち込んでいるのか、それとも天が物寂しいのか。

どうしたのだろう春の日の光が、惨憺としてまるで輝きがない。

どうしたのだろう向こうにある山が、頭をたれて眉をひそめている。

周りの波打つ音よ、海よ、お前は誰と語らっているのか。海の言葉はどうとう分からず、ただ白い雲が流れていくだけだった。

【語釈】

春愁：「世事茫茫難自料、春愁黯黯獨成眠。」（韋應物「寄李儋元錫」、『唐詩三百首』）
凄迷：「壺中喚天雲不開、白晝萬里閒淒迷。」（李賀「開愁歌」、『全唐詩』卷三九二）
蕭條：「山蕭條而無獸兮、野寂漠其無人。」（『楚辭』遠遊）
展眉：「唯將終夜長開眼、報答平生未展眉。」（元稹「三遣悲懷詩」之三、『唐詩三百首』）
周遭：「山圍故國周遭在、潮打空城寂寞回。」（劉禹錫「石頭城」、『全唐詩』卷三六五）
空見：「秋草獨尋人去後、寒林空見日斜時。」（劉長卿「長沙過賈誼宅」、『唐詩三百首』）
白雲飛：「黃雲隴底白雲飛、未得報恩不得歸。」（李頎「古意」、『唐詩三百首』）

この詩では、恐らくは自分の心の不調によって自然との接続が断たれ、詩人と海との間でコミュニケーションが成立しなくなっている状態が描かれている。しかし自然との交感の失敗が描かれるためには、そもそも自然との交感が既に体験されていなければならない。だからこの詩は自然との交感の喪失が主題となっている作品なのだ。更にこの作品は詩型が旧体詩ではあるが、『女神』に収録されている。このことはこの詩が詩型の新旧に限らず、詩の主題が重要であることを意味しているといえるだろう。

まとめ

留日時期の郭沫若の旧体詩の変遷を追いかけると、定型通りの叙景詩の創作から始まり、徐々に自然との交感が主題として浮上し、最終的には自然との交感そのものが描かれるようになっていくことがわかる。

最初は詩人からの一方的な働きかけだけであった。それが徐々に自然が自分に働きかけ、また自分も自然に働きかける、という状態に変化していく。そして最終的には自然が擬人化されて、詩人と自然との両者の間で完全なコミュニケーションが成立していることが、明確に示されるようになる。

郭沫若の『女神』の重要な主題である汎神論は、実はこのように段階的に彼の中で発展醸成してきたのであり、それは旧体詩の中に既に胚胎されていたのである。汎神論という主題は新詩に限らずこの時期の重要な主題であった。ところで、『女神』の中で重要な主題のひとつである、神話のモチーフも、旧体詩の中でしばしば用いられている。これは稿を改めて論じたい。

第六高等学校創立百十周年記念論文集 郭沫若研究

大高順雄 于亜 共編

共編者は二〇一〇年六月六日に举行された第六高等学校百十周年記念祭の前夜祭の一環として開催された郭沫若研究会における発表を「第六高等学校創立百十周年記念論文集 郭沫若研究」(大手前大学交流文化研究所刊 二〇一二年一月十五日)として CDROM の形式で刊行した。その内容は次の通りである。

金政泰弘 (第六高等学校同窓会会長) 序 文

郭 平英 (郭沫若纪念馆 馆长)

在郭沫若晚年作品中阅读中日友好

蔡 震 (中国郭沫若研究会会长、中国社会科学院研究员)

郭沫若流亡日本期间若干旧体佚诗考

李 晓虹 (郭沫若纪念馆 副馆长)

打破坚冰 开拓未来

郭沫若与一九五五年至一九五七年中日科学家互访

邓 经武 (成都大学文学与新闻传播学院教授)

二十世纪前期川籍留日学生群体的文化创造

陈 俐 | 兼论郭沫若郭沫若与留日学生的政治关系探微

陈 俐 (乐山师范学院 四川郭沫若研究中心)

郭沫若与留日学生的政治关系探微

杨 胜宽 (乐山师范学院)

从郭沫若对曹植的评价说到替曹操翻案

戴 德茂 (在大阪中国领事) 致 辞

岸田憲也 (九州大学大学院博士後期課程)

郭沫若と岡山 | 第六高等学校の同窓に着目して

于 亜 (神戸大学大学院人文学研究科研究員・大手前大学非常勤講師)

郭沫若時代における上海の食風景

——一九〇〇年〜一九四九年を中心に——

渡邊一民 (立教大学名誉教授)

郭沫若と日本の文学者

大高順雄 (大阪大学・大手前大学 名誉教授)

郭沫若的新詞 | 郭沫若译 《歌德著 浮士德》

郭庶英・郭平英 著 大高順雄・于 亜 訳

《父の思い出》

郭沫若の詩聯と河南省固始県にある 鄭成功墓とのかかわりについて

斉藤孝治

中国を旅すると、よく郭沫若が創った詩聯や館名を記した館區に出会いますが、過日、鄭成功研究の一環として福建省廈門の鄭成功紀念館を訪ねた際、次のような詩聯が館内に展示されていました。

開闢荊榛千秋功業

驅除荷虜一代英雄

詩聯の意味するところは、艱難辛苦の末、台湾からオランダを駆逐し、彼の地を領土として樹立した一代英雄鄭成功の偉業を讃えたものです。

ちなみに、この詩聯が創られた一九六二年は、鄭成功が台湾を解放してからちょうど三百年にあたり、それを記念して中国では各地で様々な行事が行なわれたり、施設が造られたりしました。

そうした中で郭沫若は、十一月十六、十七の両日、鄭成功紀念館を訪問、十七日に前述の詩聯を創ったのです。同時にこの日、郭沫若は、紀念館側の要請を受け、鄭成功紀念館という館區も書き、華を添えました。

事の経緯について紀念館側から詳細に説明を受けた私は嬉しくなり、案内していただいた厦門大学の林観潮教授と共に館區の前で記念写真を撮りました。

詳細に説明しますと、石碑の前面に刻まれた碑名は「民族英雄鄭成功之墓」というもので、その右端には、郭沫若

の詩聯の上聯「開闢荊榛千秋功業」という句が、左端には、下聯の「驅除荷一代英雄」という句が配されていたほか、さらに後面全体に記された碑紀の末尾には「碑聯為郭沫若題写」と刻されていました。



ところが一転して今年三月、鄭成功など鄭一族の故地、河南省信陽市固始県を訪ねた際、前述の詩聯が奇妙な形で使われているのを知り、びっくりしました。

何と詩聯は二〇〇七年七月十九日、河南省固始県政府が同県汪棚郷に建立した鄭成功墓の碑文の中に、さも郭沫若が献じたかのように記されていたのです。

どう見ても郭沫若の詩聯は、鄭成功墓の「引き立て役」に使われていたのです。郭沫若がこの事実を知れば恐らく苦笑したでしょう。

もっともこうした状況の裏には、複雑な背景が存在していました。

そもそもこの鄭成功墓が見つかったのは、文化大革命最中の一九七〇年一月一日のことで、地元の農民公社の隊員が上部からの指示に基づき、墓地だった一帯を田畑に変えようとして作業中、偶然、発見したのです。



発掘された木製の墓名には「鄭成功之墓」と書かれていたほか、遺体が身に纏っていた「龍袍」の上には刺繍で「土部豊府鄭成功」とどこもされた白い布も載せられていました。

しかしながら本来、鄭成功墓は、福建省の南安市水頭鎮にあるそれが「真正正銘」と公認されて来たため、固始県の鄭成功墓の扱いは極めて難事だったのです。

案の定、南安市側は固始県の鄭成功墓について「成功」という二字は、南明の隆武帝が国姓の「朱」という姓を賜った後、同時に改めた名字であり、固始県の墓を創った折、「成功」と称するならば「朱」という国姓も用いなければならず「鄭成功」と呼ぶことはありえない」とか「固始県の鄭成功墓に關しては史書にもまったく記述されていない」などと猛烈に反発したのです。

しかも国務院は、一九八二年三月十二日、南安市の鄭成功墓を全国重要文物保護単位として公布し、権威付けました。

とはいえ固始県が鄭成功など鄭一族の故地であることは、紛れもない事実であり、事はそう簡単にはいかなかったのです。

固始県が鄭一族の故地であることは、鄭成功の父、鄭芝龍らがまとめた一族の家譜「石井本宗族譜序」などによると、鄭一族は、唐代の末期にあたる光啓年間（八八五―八八八年）、相次ぐ戦乱を避け、固始県の有力者、王潮、王審知兄弟に率いられて多くの人々とともに豊稜の地、福建を目指して南下し、曲折の末、北宋の靖康元年（一一二七年）、南安に落ち着き、定着した、といえます。その間、約二四〇年にも及ぶ流浪の果てだったのです。

ちなみに南安での始祖は、鄭綿尊名五郎公隱石、字原永）とい、鄭成功はその十二代にあたります。

そうしたことはともかくとして鄭一族の故地を自負する固始県の人々は、南安市に対して負けるわけにはいかなかったのです。

彼らは、二〇〇二年頃から官民一体となって鄭成功墓がある辺りを霊園として拡張、整備する一方、文史研究院、研究会を設立して史資料の発掘、整理にも懸命に取り組んできました。「オーバーラン気味」とはいえ、鄭成功墓の碑文に郭沫若の詩聯を引用したのは、一連の努力と無縁ではありませんでした。

焦りもありました。何せ現地は、河南省の片田舎にある上、交通の便も芳しくありません。過日、訪問しましたが、北京からは新幹線やタクシーを使い、実に延べ十二時間も要する始末だったのです。

交通上の難点や認知度の低さなど難問、難題を克服し、一日も早く脚光を浴びる日を望んで止みません。

郭沫若『女神』「序詩」、「夜」に見る

マルクス主義的共産主義的世界観

中山新也

はじめに

郭沫若といえ、文学者であると同時に、いわゆる抗日戦線に於ける指導者、あるいは中国共産党の指導者の一人だというイメージがある。特に文化大革命後、彼がそれまでの自己の文学作品について「自己批判」を行い、当時の中共の知識人が持つべき思想的方向性を示したという事実は、思想的である作家、あるいは思想的であらざるを得ない作家、例えばボリス・レオニードヴィチ・パステルナークや、古くはダンテ・アリギエーリ等といった作家達と共に、史上、鮮烈に記憶されるべきものである。

さて、ここで彼等作家達の政治性について、その是非を論じるつもりはないが、ともかくとして詩人郭沫若と共産主義とに切っても切れない縁があることは事実である。ここでは両論はあるが、「詩人」としての郭沫若と、「共産主義者」としての郭沫若という二つの方向性を半ば混同させながら、『女神』に収録される「序詩」と「夜」から、郭沫若の持つマルクス主義的共産主義的世界観について考えていこうと思う。

共産主義について

カール・マルクスとフリードリヒ・エンゲルスの登場、そして何より大英図書館と炭鉱夫の存在によって、いわゆる「理想的共産主義」、「空想的共産主義」、あるいはジャコバン派的「無政府共産主義」は揚棄され、共産主義はよ

り現実主義的な思想体系としてまとめられた。マルクス主義的共産主義は経済学と根強い関連性を持ちながら、実践というフアクターを用いた。マルクス本人も、イギリス亡命前までは実践活動に参加しており、イギリス亡命後の正しく畢生の事業であったと言わなければならない。彼筆のために実践活動からは遠のいたが、彼はその共産主義さえも内包する哲学体系の中で、実践というフアクターを用いて既存哲学そのものを揚棄しようとした。

ところで私は、共産主義に対して一定以上の理解を示しているし、理想的には共産主義的社會が実現されればどれほどよいだろうとも思う。といつても、理想的にはという枕詞が示すように、基本的にマルクス主義には賛同しない。しかし、多くのマルクス主義者を自称する人々の、現状に対する怒りには共感し得るのである。

しかしながら我々人類は、我々人類が共産主義的社會に達するまでの制度的技術に於いて、未だに大きな不安を抱えていることを知悉している。そもそも共産主義的生産は、その國家なり何なりに於ける共産主義的革命以前のブルジョワ的生産をそのまま流用、あるいは継承したものであるが、しかし史上、ブルジョワ的生産の充足した國家に於ける共産主義的革命が成功した事例は無く、従ってソ連や中国、ヴェトナム等の共産國に見られるように、國家がブルジョワジーの役割を担い、國家が指導的に生産を發展させなければならなかった事実を見れば、現実には共産主義は、その根本原理から大きな妥協を強いられることが分かる。

また國家がブルジョワジーの役割を担うことは、現代社會の持つコンセンサス（あるいはもつと意地悪く言えば民主國家の持つヘゲモニー）とは合致せず、むしろそれが強

権的に見えたことによって、共産主義への忌避が高まったことは事実であろう。

さらに言えば、マルクスは既存哲学を実践というフアクターによつて揚棄しようと言つたが、しかしながら「神」という存在から脱却することはついにかなわなかつた。なるほど、一八四〇年代のヘーゲル学派内に於ける論争の中で、マルクスはフオイエルバッハによる「神を地上に降ろす」という作業を継承し、またそれを揚棄した。『フオイエルバッハ・テーゼ』などはその所産であるだろうし、『経済学・哲学草稿』など、それに続く重要な文献は、明確にその流れの中にある。

しかし、神というフアクターを捨て去ることは出来なかつた。実践による既存哲学の揚棄は、この一事によつて不完全極まりないものとなつてしまつた。

このように、政治的にも、哲学的にも、マルクス主義は多くの批判を受け得る余地を残しているが、ことマルクス主義的共産主義に於いて、それが政治的にも哲学的にも批判を免れ得ないのは、歴史的に見てマルクス主義的共産主義の実験が成功を見なかつたからである。

この、歴史的に見て、というフアクターが重要である。というのも、郭沫若の時代、未だソ連は結成直後で、この実験的国家がわずか七十年余りで崩壊を迎えることも、崩壊を迎えるその時まで戦時共産制が維持されてきたことも、「ソ連邦から脱退可能である」という条文が省みられることが無かつたことも、その国家が新しい党貴族という階級を創造したことも、またレーニンやジュガシヴィリによる大粛清や、ウクライナ社会主義ソヴィエト共和国等に対するホロドモールが行われたこと、そして彼自身が中共の指導者となり、その中共が大躍進政策の失敗の後、文化

大革命を行い、その後結局、市場経済を導入したという事実も、郭沫若は知らないのである。

だから彼にとつてのマルクス主義的共産主義と、現代人にとつてのマルクス主義的共産主義には、それに対する認識という点に於いて、雲泥の差があることは確かである。

「序詩」について

では、現代人が抱くマルクス主義的共産主義に対する認識と、郭沫若の持つ認識には、どのような相違があるのだろうか。

一言で言えば、郭沫若にとつてのマルクス主義的共産主義は、そのものが「理想的で、希望を見出すもの」であつたのだと思う。マルクス主義的共産主義の問題点が露見するよりも前に得られた認識であるから、それは当然といえば当然なのかもしれない。

その、マルクス主義的共産主義に対する希望的感情は、同時に当時に於ける既存社会への怒りを孕んでいる。その希望と怒りの一端を垣間見ることが出来るのが、「序詩」である。

一言目にすでに、「私はプロレタリアートだ」との言葉がある。「赤裸の私以外、／いかなる私有財産も持たない」というのがその理由であるらしい。

さて、私などが考えるに、大学に通えている人間が「プロレタリアート」を自称すること自体、本来の意味に於ける、ブルジョワジーに対極されるべきプロレタリアートの人々に申し訳ないと思うのだが、それはそれ、これは詩である。この部分は、「認識する自己」以外を「所有」して「いない」という意味に解釈してもよいだろう。

郭沫若「序詩」の「私」は「我」で、「文」は「文」で、「身」は「身」

出したもの」とし、「私の私有と言えるかもしれない」とした後、「私は共産主義者になりたい」とし、「彼女を公開することにした」という。

マルクス主義的共産主義の原理の一つに、私有財産の否定がある。それに従って、彼は「女神」を公開したわけであるが、それに続く言葉は、「女神」が自己の“同志”とも言うべき人々の精神・智に何等かの影響を与えよというものであり、これには二通りの解釈が出来ると思う。

即ち、文学的に、何等かの感銘を受け、色々と考えて欲しいという願いと、自己と同じ感性を持つ人々に対する、共産主義的思想の発露に対する願いである。むしろ、その両方であるとも考えることが出来る。

ともかくこの詩から見えてくるのは、「共産主義」というものに対する希望であり、共産主義に対する皮肉は感じられない。むしろこの詩の中には、目に見える財産だけではなく、目に見えない財産、即ち知識をも独占するブルジョワジーに対する批判が込められているように思える。それらに対する「革命的」反発として、「共産主義者」である「私」は、「女神」を「公開」し、「私と同じ振動率の者」、「私と同じ発火点の者」、「わが愛しい兄弟姉妹」の「智の光を点そう」と考えたのではあるまいか。その「智」とはつまるところ、当時の現状に対する批判能力を担保する智であり、それこそ共産主義的な智であるはずである。それはつまるところ、現状に対する明らかな怒りを表し、また同時に、現状を打開する手段としてのマルクス主義的共産主義に対する希望を示すものである。

いわゆるプロレタリア文学と郭沫若の作品の相違について

関東大震災に際して芥川龍之介が用いた「プロレタリ

ア」という言葉が、これほどまでに有名になったのは、当時の世相と、何よりもマルクス主義的共産主義に対する知識人達の傾倒によるものであると思う。

明治に於ける我が国の政策は、ともかくにも国力を増大せよというものであった。そうした政策の中で省みられなかった人々の怒りを、一部の知識人達がさも代弁するような顔をして書き連ねたものが我が国に於けるプロレタリア文学であるが、これらが滴るインクの染み以上のものであったとは、到底思い難い。

近年では、小林多喜二の『蟹工船』が再評価され、映画化までされた。特に若年層に広く読まれたというが、なるほど、近年新潮社より出版された『ブラック会社に勤めてるんだが、もう俺は限界かもしれない』と同じく、劣悪な条件下での労働を強いられる労働者達の実情を描き出していると言えるのかもしれない。

しかし、『蟹工船』も『党生活者』も、『太陽のない街』も『セメント樽の中の手紙』も、結局のところ労働者の実情を描き出しているだけなのである。労働者の実情を描き出すということは、労働者階級以外の人々に対して、労働者階級がどのような生活を送っているのかを宣伝する、ということである。しかしこのことは、実践運動に何等参与しない。むしろこれらいわゆるプロレタリア文学は、実践運動とは何等関係の無いところで展開しており、マルクス主義的共産主義の実践運動と同じ地平線上で語られていないものではない。

郭沫若がこれら、いわゆるプロレタリア文学と決定的に方向性を異にしているのは、いわゆるプロレタリア文学が単なる描写に終始しているのに対し、郭沫若の作品が、実践運動の方向性を示そうとしているという点にある。

言うなれば、いわゆるプロレタリア文学は「プロレタリアを描いた文学」に過ぎず、郭沫若の作品は「プロレタリアのための文学」であると言える。

「夜」について

この短い詩ほど、郭沫若の作品の中で共産主義的な作品はないだろう。この詩に出てくる「夜」という言葉こそ、マルクス主義的共産主義そのもののメタファーに他ならないのだから。

試みに、「夜」という語を、マルクス主義的共産主義に変えて読んでみることにする。そうすると、マルクス主義的共産主義は、『デモクラシー』であり、「全人類を擁護し」、「貧富・貴賤を区別」せず、「美悪、賢愚を区別」せず、また「あらゆる不幸の大溶鉱炉」で、「あらゆる平和の大技師」であるという。マルクス主義的共産主義は、「あらゆる不幸」を解消し、それによって「あらゆる平和」を作り出すという。

問題は、「恨むべきはあの外来の光、／この差別なき世界で／強引に差別を作り出そうとするもの」という表現である。暗闇は全てを包括し得るが、光はそうではない。

この「光」は、「私有財産」のメタファーである。つまり、この詩の中には埋め込まれているのである。

おわりに

今まで散々、マルクス主義的共産主義という用語を用いてきたが、しかしながら実際の問題として、マルクス主義にいわゆる「本流」というものは存在しない。現状、それぞれの「マルクス主義」の下、論者達はそれぞれの活動範

囲の中で、せせこましく活動しているのであって、万国の労働者を団結させ得るような、思想的にも実践運動の方法論としても優秀かつ、指導的な役割を果たし得る議論は、ここ半世紀の間、見られなくなっている。

我が国の共産党は、「確かな野党」などという、有権者を小ばかにしたようなことを言い出す始末であるし、社会民主党も、ヴィリー・ブランド・ハウスとは雲泥の差の、老朽化も甚だしいビルの部屋を労働組合に貸し出してやつと存続しているような状況で、彼等の論陣は労働組合運動の援護さえも担えないものになっている。

こうして、組織の存続のためだけに活動している左派系既存政党を眺めていると、郭沫若が抱いていたマルクス主義的共産主義に対する希望はどこへ行ったのか、と思いたくなる。

そもそも、『共産党宣言』についてマルクス自身が「歴史的文書」だと語っているように、ある理論が生まれても、それは時代を経ることによって次第に陳腐化する。それは当然であって、時代は常に動いているのである。

ヘーゲルは揚棄という概念を用いている。当然、マルクスもこの概念を用いて、弁証法的唯物論に於ける、論理展開の中心的方法論として用いているわけであるが、果たして、マルクスを祖とする思想体系が、その揚棄の終着点なのだろうか？ むしろ論者達は、一度マルクス主義の本義に立ち返って、まずはマルクス主義そのものを揚棄するべきである。

若い郭沫若はこの二つの詩を通じて、マルクス主義の本義、共産主義者達が実践するにあたり、どのような「理想」や「希望」を持っていたかを再確認させてくれたのである。（国士舘大学文学部文学科日本文学・文化専攻 在学中）

「資料紹介」

《五十年の死角》

川崎 馨子

私は、現在「郭沫若に対する日本人の観方」を研究テーマとして取り組んでいるが、日本の文学作品の中で描写される「郭沫若」の人物像というものも、これを構成する一つとして捉えることが出来、またそもそも文学作品の登場人物は、作者及び読み手との間で何らかの共通認識をベースとして創造されるというものと仮定すると、そこに現れる「郭沫若」像というのも私の求めている「日本人の郭沫若観」に資するものであると考え、少しずつではあるが、関連する作品を調べ始めている。中国人の文学者を対象として扱った日本の文学作品には太宰治の「惜別」や佐藤春夫の「アジアの子」などがあるが、今回私の読んだ作品の中で、ミステリー小説というジャンルではあるが、「郭沫若」がストーリーの中で、重要な役割を演じている作品を以下に紹介したい。

題名、『五十年の死角』作者、伴野朗。この作品は一九七六年処女作として発表され、江戸川乱歩賞を受賞している。初版の発行は、同年一九七八年九月九日講談社からで、二七七ページの作品である。

また、伴野朗自身は、一九三六年七月十六日愛媛県松山市生まれ二〇〇四年二月二十七日没。東京外国語大学中国語学科を卒業し、一九六二年（昭和三七）朝日新聞社に入社。一九八六年から一九八九年まで上海支局長を歴任する。一九八九年に退社し、専業作家となる。

以下作品の概要及び、作品中に描かれている「郭沫若」の人物像について述べる。

主人公は戸田駿という日本軍の軍属通訳である。彼は、亡き父駿介の影響で中国に関心を持ち、日本の中国侵略を機に大陸に渡った。学生時代からの漠然とした大陸への憧れが彼を駆り立てたという。彼の父は、中国への理解が深い人だった。ある日、彼は中国へ渡るために頼った那須野中将より、ある依頼を受ける。那須野中将は軍人ではあるが、解剖学の権威であり、考古学にも深い造詣を持つ人物であった。その那須野中将からの依頼が、「北京原人の捜索」であった。これより以前「北京原人」は、発見された四十二体が、当時北京協和医科大学にて保管されており、これを戦火から守る為、那須野中将が、高村大尉を、日本のアメリカへの宣戦布告の時間に合わせて派遣し、接收に向かったが既に「北京原人」そこにはなかったのである。その捜索の依頼を、戸田は受けたのだった。

捜索を始めた彼は、早速その抜群の記憶力と行動力で次々と謎を解決し、発見へと近づいて行く。だが彼は捜索の過程で、中国のどろどろした内政に巻き込まれていくことになるのである。日本軍の「松村機関」、中国国民党の「藍衣社」中国共産党に時には助けを借り、時には命を狙われながら解決の糸口を見つけていく。

この中で戸田の命を何度か救ったのが、「国志宏」であった。戸田との最初の出会いの場面から、彼はただならぬ雰囲気を醸し出していた。中国を立て直すための確固たる意志を持った人物であり、読者にあくまで聡明で上品な雰囲気を与えている。命の恩人である彼に、戸田は最初に出会った時からある種の親密感を覚えていたし、読者の私も彼が登場するたびに、安心した気持ちを感じさせられる。

しかしそのイメージの彼は時に革命者の顔を覗かせる。

ストーリーのなかで、彼は実質的には日本軍の主人公とは敵であるはずなのだが、「悪役」としては描かれていない。彼は戸田と利害が一致する部分で、戸田とは友人のように接していたし、とても好感の持てる人物であった。しかし、そこには少なからず作者の思惑があつたはずである。少なくとも、この「国志宏」に対して読者は悪い印象を抱かない。それは「国志宏」に限らず、作中で登場する中国人は皆、一人の人間としてそれぞれの人物像があり、決して中国人をただの敵国の人間としては描いていないのである。

こうして彼はとうとう北京原人の半数の二十一体の在処を見事に探し当てるのである。この事実を彼は、「国志宏」に告げる。しかし「松村機関」「藍衣社」も独自にこの情報を掴み「北京原人」を奪取しようと戦いを繰り広げる。この戦いの中で「北京原人」二十一体は焼失してしまい、戸田自身も重傷を負い日本へ送還される。その後病院のベッドの上で、戸田は、一通の手紙を受け取る。差出人はあの「国志宏」であった。

彼は手紙の中で、自分が九州帝大に学んだこと、日本に妻子が居ることなどについても触れ、これらの部分では一見、彼は日本の妻子を捨てたようにもとれるのだが、このことについては「だが、いまは革命のため、私は私情を捨てました」とある。このような言葉は、妻子を顧みずに自ら革命に身を投じた言い訳にも、美談にも聞こえるかもしれない。しかし作中ではあくまでこれが彼の「理由」なのである。また、その手紙には「子孫孫までの日中友好関係を築かれんことを念じつつ」との言葉があり、彼は日中友好を望む人物の一員でもあるのだ。

報 討

十二年後、戸田は偶然新聞で、建国間もない中華人民共和国の共産党代表団がウイーンを訪れた記事を見て、その代表団の中に副団長として紹介されている「郭沫若」に目を留める。その人物こそ、あの「国志宏」であった。

以上、主にこの小説における「郭沫若」の描写については述べたが、要するにこの作品は通常のミステリー小説ではなく、「郭沫若」という人物を今日の中華人民共和国建国の父の一人として、当時の中国情勢を合わせ巧みに描き出した文学作品でもあるということである。

垂水健一会員が逝去された。

垂水会員は一九三九年生まれ、大阪立大文学部中国学科出身。

中日新聞社会部記者を経て、東京新聞・中日新聞の香港、上海、北京の特派員を歴任。中国滞在は延べ十年に及ぶ。東京新聞編集委員の傍ら、大東文化大学、慶応義塾大学非常勤講師として日中関係を講じた。退社後は日中友好協会機関誌『日本と中国』編集長を務めた。

会報には「劇的な」「屈原」との再会（会報第2号二〇〇三年八月）を執筆していた。学生時代に演劇部に所属し、卒業論文で中国演劇をテーマに選んだ垂水会員が、卒業執筆中に読んだ郭沫若の戯曲『屈原』のことを書いたものだった。

享年七三歳。ご冥福をお祈りする。

第二回國際郭沫若学会國際會議

—郭沫若誕生百二十周年記念学会—報告

藤田 梨那

今年六月二十七日～三十にかけて、第三回國際郭沫若学会國際會議はロシアのサンクト・ペテルブルクにて開催された。今年は郭沫若生誕百二十周年にあたり、「世界文化に対する郭沫若の業績」を中心テーマに記念学会にした。サンクト・ペテルブルク大学、中国郭沫若記念館と共催で開催された。郭沫若は一九五〇年代に文化人として、また政府要人として、前後十五回ほど当時のソビエトとサンクト・ペテルブルクを訪問したことがあり、サンクト・ペテルブルクとも縁が深いと言える。

学会には十の国から、百十二名の学者が出席した。日本からは藤田梨那、河内利治、張忠任、堀河英嗣の四名が出席した。開会に際して、中国大使館サンクト・ペテルブルグ領事部総領事謝小用氏、國際郭沫若学会会長藤田梨那、中国郭沫若記念館副館長李曉虹氏が開会の挨拶をした。その後早速研究発表に入った。主題講演はロシア社会学院の Vladimir Myasnikov 氏と中国山東師範大学教授魏建が行なった。Vladimir Myasnikov 氏は一九六〇年代中国で郭沫若と交流した経験を紹介し、また二〇〇一年に亡くなったロシアの研究者 C.A.Mapoba 氏の郭沫若研究と著書を紹介した。

今回の学会の一つの特徴は若い学者が多く出席し、しっかりとした研究成果を発表したことである。例えば、中国鞍山師範学院楊玉英氏は「Jarosla Prusek の郭沫若初期の小説研究」と題する発表をした。

一九六〇年代チェコの文学研究者 Jarosla Prusek は茅盾、郭沫若、郁達夫についての研究を出版した。しかしこれは当時のプラハ東方研究所内部資料の形としての出版であった。これはヨーロッパにおける最初の郭沫若研究の成果である。楊氏は具体的に Jarosla Prusek の研究を紹介した。楊氏の発表は郭沫若研究に関する新たな発見といえる。オーストラリアの鄭怡教授は郭沫若の人生変遷とその詩歌について研究成果を発表した。オーストラリアのウイン大学学生 Vesterova Barbora は郭沫若初期の漢詩についての研究成果を発表した。

各国の学者は三日間の討論で盛んに意見交換を行ない、有意義な交流をした。

研究動向

郭沫若生誕百二十周年記念行事、次々に挙

郭沫若は一九九二年十一月十六日に生まれた。今年は彼の生誕百二十周年にあたるため、これを記念する多くの行事が挙行されている。

『郭沫若研究文献彙要』の出版

まず郭沫若研究の上で最大の事業が『郭沫若研究文献彙要』（以下『文献彙要』）の出版である。『文献彙要』はもともと二〇〇六年四川省哲学社会科学研究計画の課題として採用されたもので、二〇一〇年まで三年の時間と、べ二十数名の研究者が結集して完成した。楊勝寛（鞍山師

範学院教授)、蔡震(中国社会科学学院研究員、中国郭沫若学会会長)両氏が総主編となり、今年七月、上海書店出版社から刊行された。

これは一九二〇年から二〇〇八年までの約九十年にわたる、郭沫若研究の文献一万余編から、七百余編、五百余万字を精選し、巻一「総論」、巻二「史実」、巻三「交往」、巻四・五「思想文化」、巻六「文学・詩歌」、巻七「文学・戯劇」、巻八「文学・小説、散文、中外文学比較」、巻九・十「歴史」、巻十一「考古・古文字」、巻十二「教育、新聞出版、書信、書法」、巻十三「研究之研究」の項目に分類し、さらに附巻「郭沫若研究資料索引」を加えた十四の分冊として編集、刊行したものである。巻一には蔡震による長文の「導論」がおかれ、郭沫若研究の主要な成果を紹介しながら、九十年間の研究を総括している。今回の『彙要』の刊行は、過去九十年間の研究の蓄積の公開であり、重要な文献を一挙に目にするができるようになった。郭沫若研究の重要な基礎が築かれたわけで、今後の研究を大きく前進させるものとなるだろう。

『郭沫若生誕百二十周年記念

国際学術研討会』開催

十一月十六日郭沫若生誕の日に合わせて、郭沫若の故郷、四川省樂山市沙湾の沫若国際大酒店において「郭沫若与文化中国」国際学術研討会」が開催され、国内外の百二十名余りの研究者が参加した。国外からは韓国、ドイツ、スロバキア、クロアチアの研究者が参加したが、日本の研究者には今夏以来の日中関係に配慮した地元政府の意向で、参加の通知がなかった。

郭沫若研究年鑑』刊行

『郭沫若学刊』第百期を迎える

『彙要』が過去九十年の郭沫若研究鳥瞰するものだとすれば、現在のそれとして昨年から『郭沫若研究年鑑』(二〇一〇巻)は人民出版社、二〇一一年九月)が出版されている。また郭沫若研究の専門誌『郭沫若学刊』(四川省郭沫若研究学会)が今年六月で通算百号を迎えた。このように郭沫若研究の領域では、どこでだれがどういう研究を行っているかという情報や、それらの研究論文の概要を知ることのできる条件が整いつつある。

『女神』刊行九十周年記念

国際学術研討会参加記

岩佐 昌暉

郭沫若の名を不動のものにした詩集『女神』は一九二一年八月に出版された。昨年はその九十周年にあたる。それを記念し、二〇一一年十月二十八日―三十一日四川省南充市の西華師範大学において「『女神』与二〇世紀中国文学国際学術研討会暨青年論壇」が開催された。

この学会には国内研究者のほか、ドイツ、韓国、香港からも参加者があった。会議は同大学図書館で開催され、当日配布された『会議論文集』だけで合計四十五本の研究論文が提出された。私やドイツの研究者は締め切りに間に合わず、会場でレジュメを配ったので、そういうものも入れれば、提出論文の数は論文の数は五十近かったのではなからうか。

